

の文明に對する疑惑を増すに過ぎたる事を虞はるゝ、  
のである。何と云へば、日本に對する歐米先進國の態  
度は尚ほ日本を以て未開の時代と去る事遠からざるに  
のとなし、殊に勞働問題に關しては之を權利の問題と  
ならず事を避けて、主従關係と言ふか如き一種の封建道  
徳を以て之れを律せんとするを見て、日本の文明に對  
し密かに之れを冷笑すると共に、其官僚富豪の輩の狡  
猾の態度に對して憤懣の情を抱いてゐるのである。然  
るに、今富豪貴族に依つて本會の成立を遂げ、社會政  
策に關する根本方針に就て未だ政府の言明なく勞働組  
合すらも尚ほ公認せられざるに先立つて、所謂勞資の  
協調を標榜する中間團體の成立を告ぐるか如きは、益  
に日本の文明に對して蔑視の情を起さしむるに過ぎない。

今日は一國內の勞働問題すら唯其國家のみの勝  
手には行かず、國際的協力を俟たんとするの有様であ  
るに拘らば、我國のみは尚ほ獨り依然たる一種の階級  
道徳觀を以て勞働問題を律せんとする傾きあるは、眞  
に浩嘆に堪えざる所である。

第六に本會にしてよく其成立を遂ぐるに、果して之  
れが實行に當つて適任者を得べきと否や、之れ亦頗る  
至難の問題と言はなければならぬ。本會の取扱ふ處の  
ものは勞働者である。勞働者に接觸するには一種獨特  
の人格者を必要とする。本會にして若しよく其人を得  
たる時は如何に多額の基金を積み、如何に立派なる趣  
意の下に立つと雖も、恐らくは佛作つて魂入れたるの